

小笠原観光

しま人が笑顔で暮らす島。訪れる人を心のそこから魅了する島。その魅力の源泉とは？

小笠原らしさを継承していくための、保全と利用のバランスにも注目が集まっています。

小笠原は観光文化の本質に多くの示唆を与えているような気がします。

今号は、小笠原を愛してやまない小笠原島民と小笠原ファンを代表して、九名の方が

小笠原への思いを語り、小笠原にふさわしい観光を展望してくださいました。

小笠原諸島の自然と小笠原村の将来

—— 自然環境保全と村の元気につながる観光とのバランス

東京都小笠原村長

森下 一男

特集 1

観光地としての小笠原

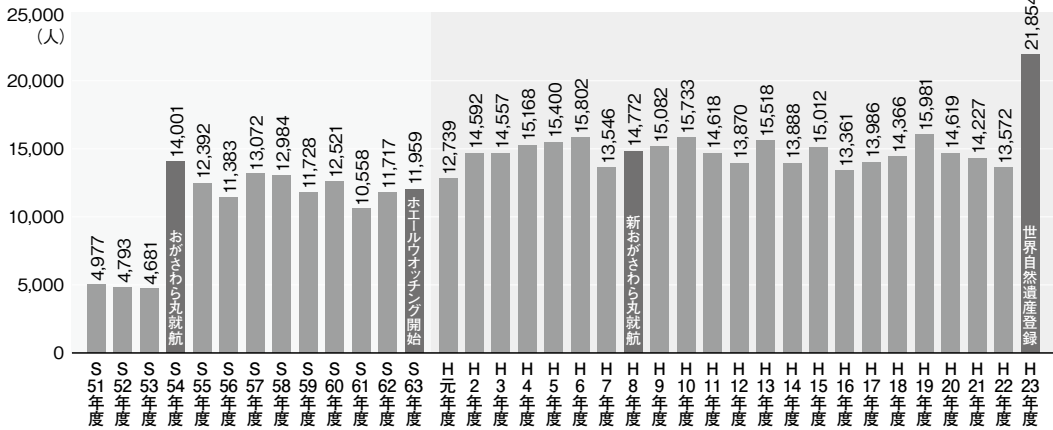
小笠原諸島は東京の南方一〇〇〇キロに浮かぶ島々で、アクセスは船便しかなく、東京竹芝から父島へは定期船おがさわら丸で二十五時間半、また五〇キロ南にある母島へはさらに約二時間の船旅が必要です。亜熱帯気候に属しており、本土とは趣の異なる自然豊かな観光地で、ここでしか見られない固有の動植物や独自の生態系を見ることができま

す。周囲に広がる大海原と緑豊かな島々から成る大自然を舞台に、クジラ・イルカウォッチングやシーカヤック、ジャングルトレッキングなどのアクティビティも盛んで、平成二十三年度は定期船で二万二千人ほどの観光客が訪れています。

小笠原諸島に人の定住が始まったのは一九世紀以降で、その歴史はわずか二百年にも満たません。戦前までは南国ならではの気候を生かした農業が盛んで産業の中心でした。太

平洋戦争を経て小笠原諸島は米国の統治下に置かれ、昭和四十三年に日本に返還されました。以後本格的な復興が始まり、基本的なインフラが整備され、本土との交通手段である定期船も代を継ぐことに改良されてきて、村民生活の安定に歩調を合わせ観光地としての小笠原諸島が認知されるようになってきました。昭和五十四年に先代のおがさわら丸になり、所要時間が三十九時間から二十八時間変わった時と、ホエールウォッチング

図1 年度別観光客（父島）



ホールウオッチング

が始まった昭和六十三年以降に観光客の伸びがあります。以後昨年の世界自然遺産登録までの観光客数は横ばい状態でした。潜在的には来訪意向のある方は多いと思われましたが、船の所要時間が長いだけでなく、一艘の船が竹芝と父島間を往復し、最低六日間を要するため、実際にはなかなか小笠原への旅行につながらなかったのだろうと考えられています。

ただそのような制約があったことが、米国

からの返還以降の急激な観光開発を抑制し、結果として徐々に観光振興を図れてきた要因の一つであったと考えています。

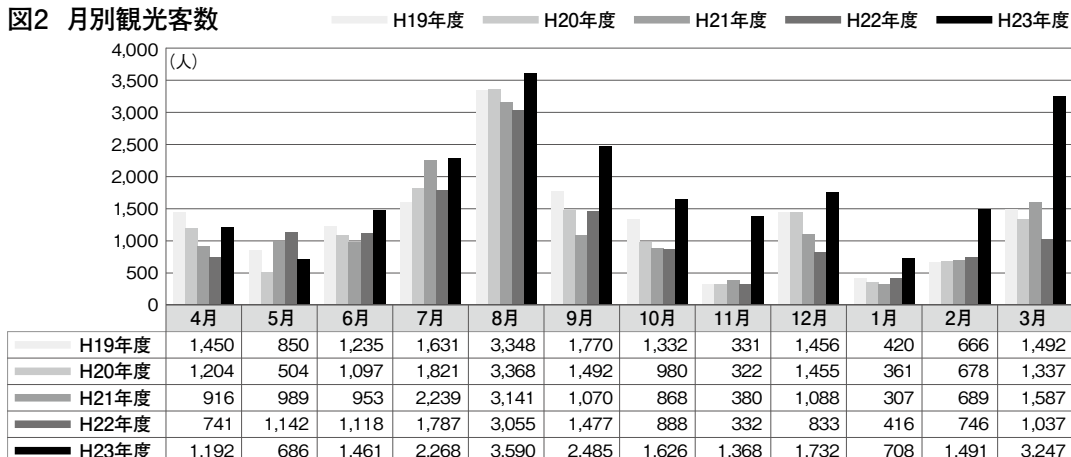
「世界自然遺産登録」を契機とした変化

しかし平成二十三年六月、ユネスコの「世界自然遺産」に登録されて以降は、小笠原の観光を取り巻く環境は大きな変化を見せています。

まず、遺産登録決定の前後から各種マスコミにおける「小笠原」の露出が大幅に増え始めました。本来、観光地としてお客さまを呼び込むためには多大な予算をかけて「宣伝」を行わなければなりません。昨年春ころから多くの媒体で「小笠原」が取り上げられ始め、こちらから求めずとも各方面に「宣伝」をしていたことになりました。「小笠原」がまだまだ認知されていないと感じていただけに日本中に知られる機会となり、来島者が増やす大きなきっかけになったと考えています。

また、遺産登録決定以降の観光客数を平成二十二年度と平成二十三年年度と比較すると約六〇%増になりました（定期船来島者ベース）。さらに例年四〜六艘程度の不定期のクルーズ客船が、今年度は二十四艘予定されて

図2 月別観光客数



この増加した分の客層は高齢者層で、また小笠原の観光事情に関する情報をあまり持たずに来る方が多くなったというのを耳にします。実際に「世界遺産だから来た」ということを私自身も聞きました。このような方々は実際に小笠原へ行くとした時、船や宿、各オプションがまとめて手配されている旅行会社のツアーを利用されています。

またその結果、二十五時間半の船旅や島に來てからの山歩き、ボートツアーもどんな内容かあまり把握できていないまま行程に組み込まれているため、後はお任せということでも、実際に参加してから体力的なことなどのミスマッチを起している場合があるようです。

そのことは受け入れる事業者側にも当初戸惑いがありました。一年を経過し次第にどのようなことを注意していけばよいかを知り、また観光客への配慮などにも徐々に慣れてきているようです。

いずれにしても大切なお客さまですから、事業者にはもてなしの心を維持してもらうよう心掛けていただくとともに、定期船の定員減による居住性の向上などのサービスに象徴されるように、観光客数を増やすということではなく、これまでの閑散期を中心に増

えたお客さまの数を高止まりさせる努力が必要であろうと考えています。

村では、世界遺産登録前からの取り組みとして、ツアーデスク事業を立ち上げ、小笠原の規模に適したツアー造成を全国の旅行会社に働きかけてきました。平成二十三年度には一定の成果の下、ツアー造成は民間に委ね、新たな試みとして小笠原村観光局を立ち上げました。この観光局は都心に拠点を置くことで、その機動力をフルに發揮し旅行会社への説明やマスコミ対応、イベント参加又は実施などを行っています。



小笠原村観光局 (東京都内)

今後も小笠原だけでなく日本の観光事情に即した対応を進めたいと考えています。

エコツーリズムを 中心に据えた観光振興

遺産登録を受けての影響としてもう一つ、観光客数の増加による自然環境へのインパクトが注視されています。遺産登録決定にあたり、世界遺産委員会からは「注意深い観光管理を実施すること」や「観光業者に対して注意深い規制と奨励措置を行うこと」などが奨励事項として指摘されました。

しかしながら、小笠原諸島では行政による各種法令・制度の他、ホエールウォッチングルールを代表とする各種自主ルールが世界遺産候補地になる前から機能してきており、「自然環境を保全しながら観光利用し、地域の振興を図る」エコツーリズムを先駆けて実践してきました。遺産登録後の観光客増に対してもそれらは有効に機能し続けており、今のところ観光客が増えたことによる大きな課題は発生していません。ただ、小笠原を世界遺産として維持していくための取り組みとしては候補地になった時からの課題である外来種対策が大きなウエートを占めており、このことはこれからも関係機関が連携して取り組んで

いかなければなりません。そして小笠原以外から入ってくる観光客による新たな外来種の持ち込みや、島間での移動がないよう到来者として村民全員が外来種対策の重要性を認識し、各種対策に協力していくことが必要です。ただ、あまり難しいことはかりを押し付けず、靴底洗いや衣服についた種子の除去を楽しんでもらえるような仕組みが浸透しているところでは。

また、私が会長を務めている小笠原エコツーリズム協議会では、小笠原におけるエコツーリズムの更なる推進のため「小笠原陸域ガ

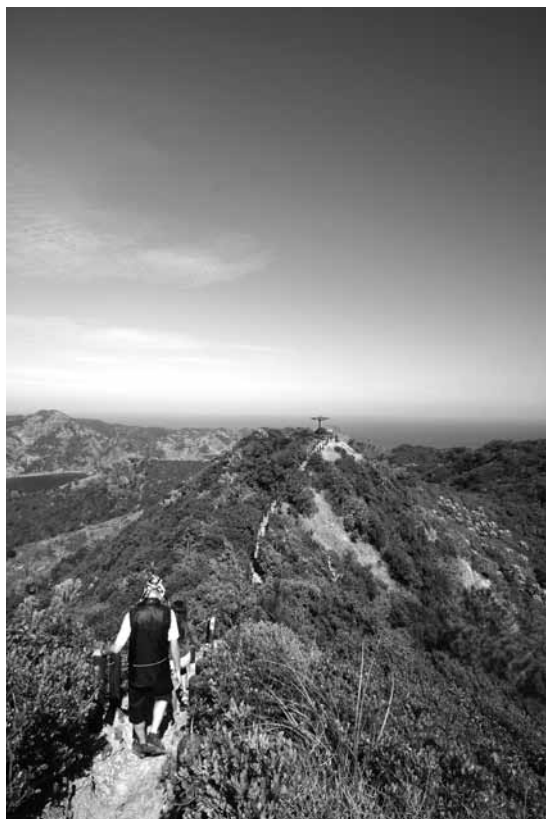


ははじ丸乗船前の泥落としマット

イド制度」の運用を平成二十三年度から始めました。これは「陸域ガイド講習の受講」「保険制度への加入」「各種ルールの遵守同意」「救命救急技術の習得」など、所定の基準を満たす者を「小笠原陸域ガイド」として登録する制度です。小笠原の自然や文化を保全して持続的な利用を図り、利用者や地域社会に信頼されるガイドとして、ガイドの社会的な地位を確立することを目的としています。登録ガイドは、世界遺産の中心的価値が陸域にあることから、遺産価値を利用しながら維持していくためのけん引役としてこれからも活躍が期待されています。

さらに、今後の小笠原におけるエコツーリズムのあるべき姿や取り組みを整理するため、エコツーリズム推進法に基づいた「エコツーリズム全体構想」の策定に取り組んでいくところです。

小笠原村では平成五年の総合計画から村づくりの視点に「自然との共生」を掲げ、エコツーリズムを基軸とした観光振興を図ってきました。私の先輩たちの世代からこのような視点を持って一歩一歩積み上げてきた結果が、今日の世界遺産登録と自然環境とのバランスのとれた観光振興につながっていると考えています。



陸域エコツアー

今後の課題

遺産登録元年は多くのお客さまにご来島いただくことができました。マスコミの取材もニュースからバラエティーまでさまざまです。そして一年を迎えたところでニュース系の取材はこぞって「登録から一年経つての課題は？」という聞かれ方になっています。課題でなければニュースではないという雰囲気を感じます。

私たちとしては、船会社の将来を見据えた定員減という英断や、ガイド登録制度の開始、

これまで村民の理解の下で取り組んできたさまざまなルールによって守られた自然などをポジティブに取り上げてもらいたいと思いがすが、どうしても観光客増によるマイナス面を引き出そうとしています。前項では「大きな課題はない」と書きましたが、課題がないといえぱうそになるかもしれません。しかし、プラス面を見ながら解決策を考えると、さまざまな規制を厳しくするよりも、事業者や村民のちよつとした自然への配慮や他の人への思いやりで片が付くのがこの小笠原の規模のように思います。

小笠原カントリーコード 〜自然と共生するための10カ条〜

- ① 貴重な小笠原を後世に引き継ぐ
- ② ゴミは絶対に捨てずに、全て持ち帰る
- ③ 歩道ははずれで歩かない
- ④ 動植物は採らない、持ち込まない、持ち帰らない
- ⑤ 動植物に気配りをしながらウォッチングを楽しむ
- ⑥ サンゴ礁等の特殊地形を壊さない
- ⑦ 来島記念などの落書きをしない
- ⑧ 全島キャンプ禁止となっているので、キャンプはしない
- ⑨ 移動はできるだけ自分のエネルギーを使う
- ⑩ 水を大切にし、トイレなど公共施設はきれいに使う

年間何十万、何百万人の観光客を迎えている他の世界遺産地域とはケタが違います。一万五千人が二万人を超えたレベルです。ゴミも気がついたら拾えばいいだけです。一カ所に集中することなくみんなが分散しながら利用すれば、自然へのインパクトも軽減するはずですよ。

村民も来島者も自然に優しくなることで小笠原の課題は解決し、その結果自然環境が保全され、村は元気を維持し、観光とのバランスがとられるものと考えています。

(もりした かずお)